

時代順まち形成史解説

犬山市内久保の名古屋経済大は六日夕、同市のNPO法人「古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク」の赤塚次郎理事長(六三)を招いて、第一回犬山学サロンを開いた。

(三田村泰和)

犬山のまちの来歴を話す赤塚さん＝犬山市の名古屋経済大で

演題は「古代史から見た犬山という場面」。埋蔵文化財調査を経て生まれ育った犬山で歴史再発見を主導する赤塚さんが、川と不可分に営まれた古代の風景を説いた。

赤塚さんによると、木曾川は江戸時代以前は犬山辺りを起点に放射状に分流しており、百平方メートルの広大な大山扇状地をかたちづつた。一帯は「瀬波」と呼ばれ、古代人は水

辺に近い段丘に集住し、背後には原始の森があった。時を経て犬山のまちが形成される順について、推論を交

えて紹介。まず今の名鉄犬山駅東側の田中天神の森に中世ごろ、湿地に面した集落ができ、おそらく水害などの影響で十五世紀中ごろに駅西側の木之下城に中心が移った。さらに十六世紀中ごろに現在の犬山城周辺が発達したと考察した。

「犬山城や城下町は微高地にあるが水をくみに行ったわけではない。それはどうしたのか。井戸を掘った。そうすれば微高地だが水が出た。周辺の湿地がダムとなり、水が行き渡った」と赤塚さん。

るのか。四百年周期で気候が大変動するという説もあり、これから想像を絶する災害が起きないとも限らない」とし、遺跡がどう滅び、どう再生したかを知ることが、過去を学ぶだけでなく未来を考えるヒントになるとした。

サロンは名経大に昨年できた犬山学研究センターの新たな取り組みで、初回は市内の学校や観光関係者に参加を呼び掛けて約三十人が集まった。さまざま

な専門家の話をリラックスして聞く場づくりが狙いで、四月以後に第二回を開く。

名経大で第1回犬山学サロン



の原野景